

ガイドがいど

レディスクラブからのお知らせ

2008年・聖書講座
マタイ福音書から学ぶ
イエスの教えとふるまい
この講座は、どなたでも途中からでも参加が可能なです。

▽講師 小河 陽(アキラ)教授
マタイ福音書は古代教会から近代に至るまで最も愛好されてきた福音書です。近代の歴史主義の時代を経て、現代人の人気はマルコ福音書に移ってしまった感があります。今年度はこの福音書を好んで読んだ人達の考えや関心に想いを寄せて、私達自身の興味や関心を呼び起こせるか、問い直します。

▽日時 前期後期各4回
①4月30日(水)
②5月28日(水)
③6月25日(水)
④7月16日(水)
15時~16時30分
尚、⑤⑧の後期は6月

立教大学学生法律相談室からのお知らせ

立教大学学生法律相談室は、立教大学公認団体として活動している団体です。
活動内容は、民法一般の分野において一般の方々から無料で法律相談をお受けし、学生による検討の後に、顧問弁護士とのチェックを経て後日、学生が回答するというものです。

▽日時 17時30分
▽会場 5000円
▽問合せ 秋山(事務局)まで
TEL 03-3993-4732

立教ヒジネススクリエーター
立教ヒジネススクリエーター塾は「世界のビジネスシーンにおいて、人に今まで味わったことのない感動を与える人材」の輩出を目的とした、立教大学卒業生が運営する集まりです。毎月1回(原則第3土曜日午前)、ビジネススクリエーターに必要なスキルをインプット・知識といった切り口でテーマを設定し、講師の方を招いての講演やグループワーク、情報交換会を行っています。会員登録を希望される方は左記のURLをご覧ください。
http://www.rikkyo.biz/

代表者 野村
2008年秋、開催いたします。詳細は7月号のこの欄に掲載いたします。
昭和33年卒業45周年同窓会
「とても卒業50周年まで待てない!」との強い要望に応え、「45周年の集い」準備が、代議員を中心に進められております。2009年に開催される集いの詳細は、次号以降に掲載予定です。

昭和33年卒同期会有志「R33の会」のお知らせ
毎年3・6・9・12月(各1日)に開催。毎回50名前後の人が集まっています。
▽場所 恵比寿ピアステーション
▽時間 17時30分
▽会場 5000円
▽問合せ 秋山(事務局)まで
TEL 03-3993-4732

立教ヒジネススクリエーター塾は「世界のビジネスシーンにおいて、人に今まで味わったことのない感動を与える人材」の輩出を目的とした、立教大学卒業生が運営する集まりです。毎月1回(原則第3土曜日午前)、ビジネススクリエーターに必要なスキルをインプット・知識といった切り口でテーマを設定し、講師の方を招いての講演やグループワーク、情報交換会を行っています。会員登録を希望される方は左記のURLをご覧ください。
http://www.rikkyo.biz/

「源氏物語の世界」
「源氏物語」は千年の歴史を誇る日本の文化遺産です。たった二人の女性の手によって、世界に類をみない文化作品がなせ生み出されたのか。そのことを「源氏物語」の最後のヒロインである、浮舟の悲劇をひもとくときながら考えます。浮舟という女性が、雅な宮廷社会のなかで数奇な運命をたどる物語に、紫式部が籠めた現代のわたくしたちへ

なぜだろう。立教にいた四年間のことを思い出すと、そこが明るい光が射す場所のように思える。楽しいことばかりだったはずはない。むしろ私は、なにをやっても冴えない、ぱっとしない学生だったのに。今年の一、用事があつて、二十数年ぶりにキャンパスを歩いた。自分が立教の卒業生だということを忘れていたわけではない。でも、卒業後は人並みに忙しかつたし、学生時代を振り返ることはあまりなかった。なにかを追いかけようとして生活し、働き、詩を書いて生きてきたのだ。私は学生時代はジャズが好きで、モダンジャズ研究会にいたこともあった。思い出すだけで赤面するくらいヘタクソなピアノを弾いていた。そしてジャズ喫茶「フリーポート」でよく時間をつぶしていた。半ば予想していたけれども、二十数年ぶりに訪れると、大学のすぐ隣にあった「フリーポート」がきれいに変わっている。暗い店内を人が歩いたり座ったりしていたあの雰囲気と、鳴り響いていた音を、確かに覚えていたのに。私のなかではまだ、店の気配は生きていたのだ。
モダンジャズ研究会の部屋は、5号館の屋上にあつた。毎日屋上に行くことができたのは、特権的だったと思う。私はピアノは手だつたけど、こちやこちや穴倉のような部屋と、いつでも晴れ晴れしている屋上が大好きだった。雨の日だつてあつたはずなのに、私の記憶のなかでは、いつでも晴れ晴れなのである。屋上に寝転がって空を見あげていたことも、その空の青い色も覚えている。
私は、詩を書きたいという希望は持っていたのだ。が、在学中はうまく書けず、悩んでいた。自分にはきつと無理なのだろうと、早々とあきらめてもいた。中学生のころから詩が好きだつたから、ごく自然に文学部に進学したわけだが、いつまでたつてもうまい具合に書けない。ジャズピアノに挑戦していたのは、私の場合、詩からの逃避でもあった。それでも、読むことはもちろん好きだつたので、詩の授業を積極的を受講していた。
図書館の旧館というのがある。奥にはの暗い一角があり、そこで本を読むことが好きだつた。辞書を引きながら英米のいろいろな詩を読んだ。英語力が不足してはいたから、わからぬところはひたすら空想力で補つて、映像的なイメージを勝手に築きながら読んでいた。優秀な学生ではなかつたのだが、それでも当時読んだ英米詩が、その後私が詩を書く上で一番の土台になっている。十九世紀アメリカの女性詩人エミリー・ディキンソンの「冬の午後には」をなめた光があるという詩を読んだときも、顔をあげて、図書館の窓から斜めに射し込む光を眺めた。今でも私はディキンソンの詩を読むと、図書館の、あの暗くて重厚な一角を、反射的に思い出してしまう。彼女の詩と人生の陰影を、図書館内部の光と影に重ねて、深く記憶してしまつたのだ。
ところで私が学生だつたのは、新左翼の最終的な段階の時期だつたのだと思う。今でも忘れることができない。ある日、小さな張り紙をみつけた。なんだろうと、それに引き寄せられた。水死した内ゲバの犠牲者の顔写真が張られていたのだ。私は茫然として、長い時間その写真を見続けた。その人は立教の学生だつたのだろうか。私にはわからない。ただ、膨れ上がったその人の顔から私は、目をそらすことができません。その残像も長く私のなかに残ることとなった。
卒業後の私は、なにかを追いかけて生きていたのだ。同時に、過去の記憶から追いかけて書いているものもある。
「フリーポート」はなくなつてしまつたけれども、もう一軒、大学近くに好きな喫茶店があつた。そこでよく本を読んでいたのだ。その店、「マダムシルク」を先日訪ねてみた。場所は移転はしてはいたけれども、あとは昔とほとんど同じで、居心地のよい雰囲気はまったく変わつていなかった。とてもうれしかった。

パソコンのデスクトップを「立教」で飾る! 立教大学オリジナルガジェット無料配布中!



デスクトップツール
ガジェットとは、面白い小物たちを意味し、立教の盾のマークが入った時計、キャンパスの写りが表示されるフォトフレームなどを、パソコンのデスクトップ上で使用できるミニアプリケーションのことです。現在たくさんの立教ファンに好評をいただいています。立教大学ガジェットを使って、RSSリーダーで立教の最新ニュースを入手したり、学術論文検索で研究課題を検索したり...。楽しくて便利なガジェットでデスクトップを飾ってみてください。
入手方法は「立教」「ガジェット」で検索
http://gadget.campuseos.com/rikkyo/にアクセス

卒業生向け 職業紹介・就職支援
株式会社立教企画では卒業生の皆様を対象に職業紹介ならびに就職支援事業を行っています。面談はEメールによる予約制となっております。詳しくは弊社ホームページをご覧ください。
お問合せ 株式会社立教企画(立教学院100%出資)
職業紹介・人材紹介担当 03-3985-2854
Eメール shokai@grp.rikkyo.ne.jp
URL http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kikaku/

「源氏物語の世界」
「源氏物語」は千年の歴史を誇る日本の文化遺産です。たった二人の女性の手によって、世界に類をみない文化作品がなせ生み出されたのか。そのことを「源氏物語」の最後のヒロインである、浮舟の悲劇をひもとくときながら考えます。浮舟という女性が、雅な宮廷社会のなかで数奇な運命をたどる物語に、紫式部が籠めた現代のわたくしたちへ

なぜだろう。立教にいた四年間のことを思い出すと、そこが明るい光が射す場所のように思える。楽しいことばかりだったはずはない。むしろ私は、なにをやっても冴えない、ぱっとしない学生だったのに。今年の一、用事があつて、二十数年ぶりにキャンパスを歩いた。自分が立教の卒業生だということを忘れていたわけではない。でも、卒業後は人並みに忙しかつたし、学生時代を振り返ることはあまりなかった。なにかを追いかけようとして生活し、働き、詩を書いて生きてきたのだ。私は学生時代はジャズが好きで、モダンジャズ研究会にいたこともあった。思い出すだけで赤面するくらいヘタクソなピアノを弾いていた。そしてジャズ喫茶「フリーポート」でよく時間をつぶしていた。半ば予想していたけれども、二十数年ぶりに訪れると、大学のすぐ隣にあった「フリーポート」がきれいに変わっている。暗い店内を人が歩いたり座ったりしていたあの雰囲気と、鳴り響いていた音を、確かに覚えていたのに。私のなかではまだ、店の気配は生きていたのだ。
モダンジャズ研究会の部屋は、5号館の屋上にあつた。毎日屋上に行くことができたのは、特権的だったと思う。私はピアノは手だつたけど、こちやこちや穴倉のような部屋と、いつでも晴れ晴れしている屋上が大好きだった。雨の日だつてあつたはずなのに、私の記憶のなかでは、いつでも晴れ晴れなのである。屋上に寝転がって空を見あげていたことも、その空の青い色も覚えている。
私は、詩を書きたいという希望は持っていたのだ。が、在学中はうまく書けず、悩んでいた。自分にはきつと無理なのだろうと、早々とあきらめてもいた。中学生のころから詩が好きだつたから、ごく自然に文学部に進学したわけだが、いつまでたつてもうまい具合に書けない。ジャズピアノに挑戦していたのは、私の場合、詩からの逃避でもあった。それでも、読むことはもちろん好きだつたので、詩の授業を積極的を受講していた。
図書館の旧館というのがある。奥にはの暗い一角があり、そこで本を読むことが好きだつた。辞書を引きながら英米のいろいろな詩を読んだ。英語力が不足してはいたから、わからぬところはひたすら空想力で補つて、映像的なイメージを勝手に築きながら読んでいた。優秀な学生ではなかつたのだが、それでも当時読んだ英米詩が、その後私が詩を書く上で一番の土台になっている。十九世紀アメリカの女性詩人エミリー・ディキンソンの「冬の午後には」をなめた光があるという詩を読んだときも、顔をあげて、図書館の窓から斜めに射し込む光を眺めた。今でも私はディキンソンの詩を読むと、図書館の、あの暗くて重厚な一角を、反射的に思い出してしまう。彼女の詩と人生の陰影を、図書館内部の光と影に重ねて、深く記憶してしまつたのだ。
ところで私が学生だつたのは、新左翼の最終的な段階の時期だつたのだと思う。今でも忘れることができない。ある日、小さな張り紙をみつけた。なんだろうと、それに引き寄せられた。水死した内ゲバの犠牲者の顔写真が張られていたのだ。私は茫然として、長い時間その写真を見続けた。その人は立教の学生だつたのだろうか。私にはわからない。ただ、膨れ上がったその人の顔から私は、目をそらすことができません。その残像も長く私のなかに残ることとなった。
卒業後の私は、なにかを追いかけて生きていたのだ。同時に、過去の記憶から追いかけて書いているものもある。
「フリーポート」はなくなつてしまつたけれども、もう一軒、大学近くに好きな喫茶店があつた。そこでよく本を読んでいたのだ。その店、「マダムシルク」を先日訪ねてみた。場所は移転はしてはいたけれども、あとは昔とほとんど同じで、居心地のよい雰囲気はまったく変わつていなかった。とてもうれしかった。

青春!立教



野木 京子氏 (55英)
のぎ きょうこ

プロフィール
1957(昭和32)年熊本県坂本村(現・八代市)生まれ
立教大学文学部英米文学科卒
『銀の惑星その水棲者たち』(矢立出版/1995)
『枝と砂』(思潮社/2000)
『ヒムル、割れた野原』(思潮社/2006)
※H氏賞受賞
※H氏賞(エイチししょう)
日本現代詩人会が主催する、新人のすぐれた現代詩の詩集を広く社会に推奨することを目的とした文学賞。過去の受賞者には吉岡実、入沢康夫、白石かずこ、など。

ミリー・ディキンソンの「冬の午後には」をなめた光があるという詩を読んだときも、顔をあげて、図書館の窓から斜めに射し込む光を眺めた。今でも私はディキンソンの詩を読むと、図書館の、あの暗くて重厚な一角を、反射的に思い出してしまう。彼女の詩と人生の陰影を、図書館内部の光と影に重ねて、深く記憶してしまつたのだ。
ところで私が学生だつたのは、新左翼の最終的な段階の時期だつたのだと思う。今でも忘れることができない。ある日、小さな張り紙をみつけた。なんだろうと、それに引き寄せられた。水死した内ゲバの犠牲者の顔写真が張られていたのだ。私は茫然として、長い時間その写真を見続けた。その人は立教の学生だつたのだろうか。私にはわからない。ただ、膨れ上がったその人の顔から私は、目をそらすことができません。その残像も長く私のなかに残ることとなった。
卒業後の私は、なにかを追いかけて生きていたのだ。同時に、過去の記憶から追いかけて書いているものもある。
「フリーポート」はなくなつてしまつたけれども、もう一軒、大学近くに好きな喫茶店があつた。そこでよく本を読んでいたのだ。その店、「マダムシルク」を先日訪ねてみた。場所は移転はしてはいたけれども、あとは昔とほとんど同じで、居心地のよい雰囲気はまったく変わつていなかった。とてもうれしかった。

ホームカミングデーは10月26日(日)に決定!今年もぜひご予約ください。